



福祉系

対人援助職養成の

現場から^④

西川 友理

子どもが夢中になったもの

Twitter を何気なく見ていた時に、「年パス買った水族館で1歳の息子が夢中になったものは エスカレーター、エレベータ、階段」という書き込みを見つけました。

わかる！わかりすぎる！あったあった、そういうこと！と思い出しました。

児童養護施設の職員で幼児を担当していた頃、施設の行事で遠足の企画を担当した

ことがありました。少し遠くの山までハイキングです。施設は大都市の中にあったので、普段めったに触れない自然あふれる所に行く、となると、アレも見せてあげたい、コレも見せてあげたい、と色々考えてしまいます。

幼児の足でも何とか登れる距離で、見晴らしも良いところで、途中には小さな公園で休憩をして、ここに何分位滞在して……と、様々に考え、準備をして、下見もして、思いや願いをぎゅうぎゅうに詰め込んだ企

画でした。

いざ当日、いささかトラブルはありつつも、皆で楽しく過ごすことが出来ました。ちょっと大変な山道もみんなで頑張る事が出来ました。見晴らしがいいところでお弁当を食べることが出来ました。公園でも思いっきり遊べました。帰りの電車ではみんなへとへとに疲れて、充実した一日を過ごすことが出来ました。

翌日、遠足どうやった？と子どもたちに聞いたところ、4歳のN君は目を輝かせて「蜘蛛がすごかった！」

と言いました。

「く、蜘蛛?!」

「うん、蜘蛛!めっちゃでっかった、めっちゃかっこよかった。」

そういえば登山口の側溝に、ジョロウグモがいたっけ…あれか…

「蜘蛛か、そ、そうか、うん、そうやな、うん、ジョロウグモ、でっかったな！」

「ジョロウグモ!ジョロウグモっていうんか、あれ?!」

そしてN君は本棚に走り、図鑑でジョロウグモを探して、見つけて

「おおー!こんなんやった、こんなんやった！」

と喜んでいます。

確かに、普段の都会の生活の中では、ジョロウグモに出会うことはめったにありません。

しかしあんなに色々考えて企画してこちらが意図したトピックへの反応はあまり見られず、うーん、蜘蛛に全部持っていかれたか、まあ、いいかあ、山に行かないと見られないものだしねえ…と思わず苦笑いしたのでした。

学生が夢中になったもの

ところで、養成校でもこれと似たようなことが時々あります。

実習指導の授業の冒頭で、1人の学生から

「児童養護施設の実習、私の一言で、子ども達を傷つけないだろうか、何かとんでもないこと言っちゃわないだろうか、不安なんです。」

という意見が出ました。ああ、そうだよねえと思いつつながら、

「意図的に傷つけようとは思ってないんだから、大丈夫。それに、生きていたら、人同士って傷つけてしまったり傷を受けたりすることがあるもんですよ。『社会は健全に傷つけあう仕組み』という言葉もあるくらいだよ。奥田知志さんという方がおっしゃってるんだけどね。」

と、授業がはじまってすぐ、5分ほどのところで、ほろっと言って、授業に入っていました。

約1時間強ののち、授業が終わり、私が教室を出ようとする、学生に呼び止められました。

「ちょ、先生、さっきの言葉、社会って傷つく仕組み、みたいな言葉、あれ、誰の言葉でしたっけ？」

「? なんでしたっけ??」

授業のメインの内容とは関係のない話だったので、一瞬何の話かをされているのかも気づきませんでした。たまたまそのあと急ぎの作業があった私は、慌てて

「あ、わかった!あのね、おくだともしさん、って人ですよ！」

とだけ言って走り去りました。部屋に帰り、

少し作業して、また廊下に戻ると、そこに一人の学生がひとりでスマホをいじっている状況に出くわしました。さっきの学生です。そういや急いでいたとは言え、乱雑な対応をしてしまったな、と思った私はその学生に近づき、話しかけました。

「あのね、あのさっき言った人の名前の漢字はね…。」

「もう調べました。今、読んでます。」

「あっ… そ、そっか、それは失礼しました。」

スマホの画面は、奥田知志さんのインタビュー記事です。

「面白いですね、このひと。」

と言って、じっと読んでいる学生です。

私も奥田さんのお話は好きなので、ぽろっと出た言葉にここまで食いついてきてくれるなんて、と嬉しく感じました。

学生が自ら調べたこと

今から 10 年程前、少人数のゼミのようなクラスで教えていた時のことです。当時、「障害者」という表記について、国の障がい者制度改革推進会議で話し合いがもたれたことがありました。「障がい者」「障害者」「障害者」「チャレンジド」等、当時の国ではどのような表記が適切でないと言われていたのか、ふさわしいと議論されているのか、授業の中で紹介しました。

2 週間ほど後の授業、私も含めたクラスのみんなの前で S 君が「な、聞いて聞いて」と皆に話しかけました。

S 君は障害者支援施設でのアルバイトをしています。

「そのアルバイト先でね、利用者さんと職

員さんの皆に聞いてみたんですよ、『障害者』と『障がい者』と『障害者』と『チャレンジド』、どの表記がいいか、って。」

「ほうほう！」

「そしたら、1 人は『やっぱり“害” っちゅう漢字は嫌やな』って言ってたんです。」

「ははあ、やっぱそうか…。」

「だけど、それ以外の人は全員『本気で、どれでもええわ！』って。『ていうか、どうでもええわ！好きにせえ！！』って言ってた！」

「へー！」

「そんな呼び方より、大事なもんあるやろ！って言ってたんですよええ。」

「なるほどなあ…それで、それ以外の人って何人くらい？」

「んー、ざっと 100 人くらい？かなあ。利用者さんの友達とかも含めて、いろんな人に聞きました。」

「100 人?! 2 週間で?!」

確かにきちんとした研究や調査ではないですし、話を聴いた対象も、こんなことを気軽にできるタイプの S 君の周囲にいる人達に聞いただけですから、偏りは激しいものです。

しかし、少なくとも S 君のコミュニティにおける傾向や、S 君が関わる利用者や支援者の考えが言語化されたことで、S 君のコミュニティの文化が強化されたり変化したりといった行動ではあったと思います。

なにより、2 週間で身の回りの人に話を聴き、自分の手触りのあるリアリティをもって、状況を把握しようとした、その行動力が完全にこちらの想定外でした。私も楽しくこの話に参加させてもらい、考えを深めました。

学生のやりたいこと

ある時、卒業年度の学生たちに、キャリアについて話をしました。将来について考える事、自己分析の大切さなど、色々と話をした後に、こう言いました。

「何の仕事につくのかっていうのは手段であって、目的じゃないんですよ。保育者になったら、夢がかなう？保育者になるってのは目的ではなくて、あなたが達成したい目的のための手段なんだと思います。あなたの目標、やりたいことは何なのか、考えてみましょう」

…という話をした翌日のことです。一人の学生が訪ねてきました。

「先生、昨日の将来の話を聞いて思ったんですけど……。」

「はい。どうされました。」

「私、校則を変えたいんです」

「は、え？……と、いうと、ええと、今の、この、ここの学校の校則？」

「いや、全国の、いろんな校則を。中学とか高校の、理不尽な校則を。」

「へえ！うん、そうですか、なるほど、そうなんですなー。」

「で。どうしたらいいでしょうかねえ。」

「お、おう、そうですね。ちょっと待って、一緒に考えましょうか、ええとね…唐突で頭が追い付かない……笑」

私は全国にいるそういった活動をしている人を何人か紹介しました。

「いつも Facebook で活動を発表されているんだけどね、ああ、アカウント持っていないんだね、だったらアクセスするためにこれこれこういう手段があるか

……。」

そうか、そういや若い人は Facebook を使うのに抵抗があるらしいしな、と思い至り、

「また何か面白そうなイベントや勉強会があったら情報提供しますね。」

という話をした次の休み時間、その学生が言うには

「Facebook のアカウント作りました」

「え！ほんまに?!今?」

「はい で、紹介していただいた人に友達申請しました」

「いやいやいや待って待って早すぎる!」

というわけでどんどん好きな方向に走っていく学生に驚きつつも面白くわくわくしてしまいました。学生はどんどん自分の地図を広げていきます。

国家資格ということ

私は社会人になった年から、「福祉系対人援助職」の養成、つまり保育士、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士等、国家資格と呼ばれる資格を持つ人たちを養成する仕事に、何かしら携わらせていただいています。現場職員をしていた時にも、社会人大学院生をしていた時にも、受験対策講座や養成講座の講師などをしてきました。

「国家」資格の養成ですから、教えるべき科目も、その科目の中のカリキュラムもしっかり決まっています。私たち養成校教員のやるべきことは、国の指定された科目を、指定されたように教えること。学生も「やらねばならぬ指定された学び」をこなすこと。それが養成校にとって基本になる

ことです。

ですから、それぞれの資格の養成カリキュラムが改訂される時には、毎回ちょっとした騒ぎになります。

実はここ5年程の間に、社会福祉士や精神保健福祉士、保育士などのカリキュラムが相次いで改訂されました。科目名が変わったり、実習時間が変わったり、科目内容が変わったりと大きく変化がありました。

養成校教員は国の動向を見ながら、次の養成のあり方を考えます。

「こんな内容も入れることになるんですね」

「〇〇についてはどう教えることになるでしょうか」

「■■の科目が増えたのはいいことですね。△△の科目の後に設定するといいかなあ」

「厚生労働省は☆☆についてはどう教えるという考えなんでしょう」

時には国から提示されたカリキュラムに疑問を抱き、まれに危機感を抱くこともあり、パブリックコメント募集期間に意見を挙げることもあります。

それほどまでに、カリキュラムは大切だと考えています。

シラバスをつくるということ

さて、上記のように国から提示されたカリキュラムの規定から外れないように配慮して、各養成校教員は自分の担当科目のシラバスをつくります。

国から規定された内容から外れないように、さらにはそれをどうすれば学生が消化

できるような形に出来るかを考えて、授業計画を立てます。授業内容と授業方法を考えて記入するだけではなく、最近は一つつひとつの授業の予習の方法を入れこんだり、ディプロマポリシー（各学校の学位授与の条件）との関連性を明記することなどが求められています。養成校によっては、いわゆるアクティブラーニングの方法を考えて、その内容もシラバスに盛り込むようにと指示されることもあります。

そして、シラバスに沿って 授業を実施…するはずなのですが。

実際は、授業内容がすべてこちらの想定したシラバス通りの内容になるかというと、そんなことはほとんどありません。考えてみればそれは当たり前の事で、学生一人一人の興味関心も、その時々の背景となる社会状況も違う中で、その年度のはじまる前に考えた内容からは、授業内容はどうしてもズれていってしまいます。それでも「国家資格」を付与する以上、最低限教えないといけないことは教えないと、というところは必死になって教えますが…。

さらには先述したように、学生はこちらの想定を軽く超えて、どんどん学びを自分で見つけていくことがあります。そのような姿を見ると、やれカリキュラムではどう書かれているとか、この改正ではここが足りないだとか、そんなことをわあわあ騒いでいる教員側が、なんだかとてもちっぽけに思えてきます。

カリキュラムやシラバスよりも、学生の声や考え、各々の人生から生まれてくる言葉の方が、ずっと豊かで、手触りがあり、

面白く、重要なものが多いと感じるのです。

学生はシラバスよりも奇なり

…とでもいえるほど、学生は新しい知を自分で見つけていこうとする場面に出くわすことがよくあります。

人の学ぶ力はそんなカリキュラムの中に閉じ込められるものでも、科目担当教員が想定している授業シラバスの中に納まるものでもない、そんなヤワなものじゃないんだよ、ということを、先に挙げた学生たちは教えてくれます。

知りたいという気持ち、面白いという気持ちは、どんどんとその学生の世界を広げていきます。そして、授業というものは教

員と学生の相互行為ですから、その影響を受ける私と言う教員も、また新たな世界に目を開かされていきます。

国家資格の勉強の内容は決まっています。カリキュラムの中身、教えるべき内容。それらをおろそかにしていいと考えているわけではありません。それはやはり骨組みになる部分なので、とても大切だと考えます。まずはそれらが無いとはじまりません。

しかし学生それぞれの学びは、そのカリキュラムからは想定できないほどに広がっていきます。

それを間近で見せていただくことが出来る養成校教員というのは、やはりとても楽しい仕事だなあと思うのです。

今日も学生が教えてくれる知の広がりを楽しみに、授業に向かうのです。